



12/12/16

DOON UNIVERSITY, DEHRADUN  
End Semester Examination, First Semester, 2016

School of Languages

M.A. Integrated- Japanese

Course: SLJ-403 Theories and Practices of Translation

Time Allowed: 3 Hours

Maximum Marks: 50

Note: Attempt All Questions.

英語にしないで。

(15点)

1. 「ノーベルレクチャー」は、ノーベル賞が始まった1901年から行われている伝統行事で、その年の受賞者が、受賞理由となった研究の意義やみずからの思いを一般の人に向けて話します。

大隅さんは、日本時間の7日夜、ストックホルムにあるカロリンスカ研究所の大ホールでクリスマスツリーが飾られた壇上に立ち、1000人余りの聴衆を前に、「細胞のリサイクル機能『オートファジー』」というテーマで講演に臨みました。

この中で大隅さんは、これまでの研究者人生を振り返り、「とにかく毎日顕微鏡をのぞいていた。顕微鏡をのぞき込んでいる時間だけほどの研究者よりも長かったと思う」と話していました。

そして、オートファジーががんやパーキンソン病などさまざまな病気と関係していることが明らかになりつつある現状について説明したうえで、「私の研究は、細胞の中の仕組みを解明したいという純粋な好奇心によって続けられてきたが、今や生物学において主要な分野になっている。科学を何かに役立てるためのものではなく、文化としてとらえ、育ててくれる社会になってほしい」と訴え、「オートファジーに関する私の基礎研究の成果をノーベル財団が認めてくれたことはこの上ない喜びだ」と語って講演を締めくくると、会場の人たちはみな立ち上がり、盛大な拍手を贈っていました。

ノーベル賞の授賞式は日本時間の11日未明、ストックホルム中心部のコンサートホールで行われます。

(15点)

2. 日本人たちが、イスラムをまったく嫌っていないことに驚いたし、うれしかったです。

日本を訪れた東南アジア諸国のイスラム教徒の青年7人がこんな感想を口々に話した。

国際交流基金の招きで各地を回った後に懇談したときの声だ。

研究や宗教間対話などの活動に携わってきた男女で、研究者や学生と交流したり、東日本大震災の被災地を訪ねたりした。各地でイスラムを知ろうとする人々の積極的な姿に感銘を受けたともいう。

日本人にはうれしい評価だ。一方で、彼らや彼女らの切ない心情ものぞく。外国では自分たちは嫌われる存在かもしれないという不安と憂鬱(ゆううつ)。

今はイスラム教徒にとってつらい時代だろうと思う。米国の次期大統領トランプ氏は、イスラム教徒への警戒感をあらわにした。欧州でもイスラム教はテロを連想させるイメージを一層強くまとうようになった。

「民主主義や人権、市場経済といった考え方は、イスラム教徒にもほぼ受け入れられるものです」と、マレーシアからの女子大生。「女性や社会弱者の権利も尊重する宗教なのですが……」

(15点)

3. 1980年代から急速に発展してきた情報化。

コンピュータやインターネットなどを駆使した様々な情報が現代の我々の周りを取り巻き、それはいまや我々の生活に不可欠なものとなっている。権力が情報を支配し、情報が国民をコントロールする時代が、まさに到来しつつある。この様な情報化により、以前と違って膨大な資料の中から手探りしなくても簡単な手順ですぐに知りたいものを手元に置くことができる。また、情報源が豊富であるということも非常に魅力的なことだ。はたからみるとメリットだけが存在する様に感じられる現代の情報化だが、ふと考えてみると我々は知らぬ間にこの現象に溺れている様にも思える。

近頃のジャーナリズムの動向を見てみると、国民の「知りたい」という要求に答えようとする行動の意義と、単なる“覗き見”のような行動とを勘違いしているような気がする。ダイアナ元妃の激突死でパラッチを始めとするメディアのあり方が問われたが、これは情報の受け側である我々にとっても深く心に残る出来事である。確かにスキャンダルは私達の注意を引くし、心の底にある微妙な興味を沸かせる事も事実である。だが、部数や視聴率のためとはいえ、私生活を覗き見するようなメディアは明らかに負のジャーナリズムといえるのではないだろうか。

憲法で保障される表現の自由と、受け側の権利とのバランスを保つのはかなり困難なことではあるが、何よりも大切なのは情報を提供する側も、そしてその情報の受け側も独自のモラルを持ち、それに従う自分との約束を果たしていくということだといえるであろう。

(5点)

4. 新潮社は30日、作家、村上春樹さん(67)の新しい書き下ろし長編小説を来年2月に刊行する、と発表した。新潮社によると、この新作は原稿用紙約2千枚に上る本格長編で、全2冊となる。タイトルや内容、詳しい発売日については後日改めて発表するという。村上さんの長編小説としては平成25年4月に発売された「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」(文芸春秋)以来3年10カ月ぶり。同作は発売7日目で、発行部数が100万部を突破する大ベストセラーとなった。

また複数巻に及ぶ本格長編としては、21年5月から22年4月にかけて全3部が刊行された「1Q84」以来約7年ぶりとなる。